

○ + △ + □ = ○

港まちづくり協議会
2018年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
ANNUAL REPORT 2018

INTRODUCTION

この冊子は、2018年度の港まちづくり協議会の活動報告書です。お世話になった皆様方へ、1年の成果をご報告すると共に、この活動が広がっていくためのツールになれば幸いです。

これまでの活動報告書と比べると、一つひとつの事業紹介を思い切って割愛しており、数的成果のみを後半にシンプルに掲載しています。その分、WEBやSNSで、より充実した情報が閲覧できるようになっています。代わりに冊子の前半では、2018年度の中心的な事業となつたビジョン改訂にまつわる^{じゅんじん}遠巡を少し長めの特集として掲載しています。今後はまた別のテーマを特集とする予定ですが、私たちは、この特集の編纂を通して、これから始まる「み(ん)なとまちビジョン」の次なる展開、その現在地や未来を皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

新しくなったビジョンブック（別冊）は、これから毎年発行される報告書の5、6年間分をあわせて綴じられるようになっています。小さな街の1つの取り組みですが、その軌跡がどこかの誰かの参考になっていけば嬉しく思います。

ビジョンブックにセット！



CONTENTS

02 COLUMN & ISSUE

“ビジョンて?”とか“みんなって誰?”とかの逡巡について

07 DATA

- 開催事業数・テーマ別事業パートナー数
- 港まちづくり協議会の活動参加者数
- メディア掲載実績
- 会計報告

COLUMN & ISSUE

“ビジョンて？”とか
“みんなって誰？”とかの
逡巡について

Text by Keiichi Furuhashi

あなたは「自分の街のビジョンや課題」について
考えてみたことがあるだろうか？
おそらく「自分の暮らしや仕事」であれば、
共に生きる誰かとの未来を想像したり、
求められる課題の解決に向けて
真剣に取り組んだこともあるだろう。
でも、街についてはどうだろう？

私たちには誰もがどこかの街に暮らし働きながら、
かけがえのない人生を生きている。

言いかえれば、
誰もが人間生活の場としての街をつくる
“みんな”の中の一人ひとりなのだ。

そう考えたとき、私たちが関わる街の風景は
どんなふうに見えてくるのだろう?

見直すというより創造する

2018年度は、2013年に作成した港まちづくり協議会の中長期計画「み(ん)なとまちVISION BOOK」(以下、ビジョンブック)の改訂年度だった。およそ1年をかけて当時の計画を見直す。それは、古いものを見直すというより、新しい視点で再創造するという方が適切な行為だった。

新規事業の構想では、「なごやのみ(ん)なとまち¹」という活動コンセプトを、いかにして多様な面々と共に体現できるのかを熟考した。様々な意見が交錯し、先の見えない議論に暗鬱とした気持ちに苛まれたことも。その逡巡は、今も続いているが、いつからか自らの大地をコツコツと耕しているような不思議な感覚も育ち始めている。ここではその改訂プロセスで抱いた、「“みんな”って誰?」という漠然とした疑問を緒に、その逡巡を綴ってみたい。



“みんな”とは一体誰なのか?

公金を原資とする港まちづくり協議会の事業では、公平性と透明性に加え、事業対象エリアの市民の合意、つまり「“みんな”的合意」が基本原則となる。しかし、“みんな”=すべての人でないことは、現場感覚としておそらく正しい。逆に、すべての人の合意を目指すと、最大公約数を考慮した無難な活動になってしまう。文句はなくとも誰にも支持されないのは意味がない。が、すべての人でないにしても、“みんな”的合意が欠かせ

ないのは先に述べた通り。では、その“みんな”とは一体誰なのか?

私たちは日々の街場に立ち、この活動に対する街の“みんな”からの評価を陰に陽にと受けている。「み(ん)なとまち」を掲げながら、すべての人の声は未だ聞ききれていない。厳しいご意見を頂くことは少なからずあり、狼狽してしまうことも度々だ。

しかし、一方で、「私はこう考えるけど、みんなはどう?」と他者へと働きかけ、自らの想いを有機的に繋ごうとする人もまた少なくない。そうした人の周囲には、緩やかなコミュニケーションの輪が広がっていく。そこには、「み(ん)なとまち」の実現が垣間見られるよううれしい気持ちになる。難しいのは、そんな自発的広がりを予め計画することはできないし、客観的な判断で余計な手出しをしてしまうと、広がりの芽を摘んでしまいかねないこと。それよりも、その活動プロセスを共に歩むような心持ちで、主観的に一緒に考えたり、悩んだり、やってみたりをしながら、事態が好転していくのを積極的に待つというようなことが大切ではないかと考える。多くの場合、余計なことをしまい、その度に反省するばかりでもあるが。



話を戻そう。日本人の社会構造を読み解いた古典に、中根千枝『タテ社会の人間関係-単一社会の理論』(1967)がある。中根によれば、日本人は、「場」という一定の地域や所属機関等に自らの行動が規定される。その傾向は、日本人のコミュニケーションの原型であり、最も変わりにくい部分なのだという。なるほど、私たち日本人は、

「場」に縛られやすく、そこで使われる“みんな”という言葉も、ある特定の準拠集団でしかない場合が確かに多い。場を重んじる協調性は日本人の強みであるが、“みんな”的誤用は、少数派を排除する同調圧力にもなりかねない。“みんな”が誰なのかは可変的。それ故、誰を“みんな”と思考するかには自覚的でありたい。

では、そんな“みんな”を掲げる港まちづくり協議会のビジョンはどうあるべきか?まちづくりにおいては、“みんな”へと働きかける主体的な個の存在と、その活躍を受け入れる“みんな”的寛容性や包容力が大切だと考える。私達は敢えて“みんな”と向き合いながら、「なごやのみ(ん)なとまち」の実現を目指したい。またビジョンは方向性であり、それにインスピレーションを得た主体が、実際の活動をどう描き、具現化するのかこそが重要。私たちは、どちらかといえば、そこで動き出すプロセスを少しでも良くすることで精一杯だが、その「動き出すプロセスを少しでも良くする」ということが案外近道なのかもしれない、と最近では考えるようになつた。



“みんな”との関係性の再構築

2019年4月からは、新ビジョンに基づく取り組みがスタート。しかし、その矢先に街の中心商業施設であった築地公設市場が閉鎖。港まちを取り巻く状況は、目に見て厳しさを増している。これに影響され、昨年度より準備を進めてきた空き店舗対策事業も急遽停止を余儀なくされてしまった。そんな中、2015年よりスタートした「栄東まちづくり協議会」

(以下、栄東まち協)でも、ビジョンの作成が始まっていることを知った。これまで名古屋市で、環境整備協力費を活用したまちづくり事業を実施するのは、港まちづくり協議会のみだったが、栄東地区にも同種の施設や仕組みが誕生し、新しい取り組みが始まっている。同じ仕組みを活用し、栄東地区ではどのような活動が展開しているのだろう?意見交換会を申し入れたところ、快諾をいただいた。そこで、当会の早川会長とビジョン改訂でもお世話になった日本福祉大学の吉村教授をお誘いし、栄東まち協を訪問した。2時間にわたる意見交換会に加えて、一杯会での居酒屋談義は夜更けにまで及び、とても有意義な機会となつた。



栄東まち協の辻本会長、田端副会長のお話には、「地域とは何か?」の再考を迫られた。現在の栄東は、名古屋市都心の有数な繁華街。その賑わいに一步足を踏み入れれば、さまざまな商売屋、特に飲食ではレストランや居酒屋、バー、クラブなどがひしめき合い、そこで働く数多くの外国人とすれば違う。アジアを旅するような高揚感に包まれるが、そこには居を構える数多くの住民がいることも特徴的だ。そんな栄東の街区単位でのまちづくりは、名古屋市で主流の学区単位のそれとは様相が異なる。例えば、「安心安全」と「街の賑わい」はトレードオフで、一方を追求すると他方が成立しなくなる。が、街区ではそれらの一方と他方が同じ街で暮らし働く。その調整は日常文化といつてもいい。問題は人それぞれだが、何が地域課題かは、その地域が目指す姿とのギャップによって決まる。しかし、その構成員のおかれている状況が複雑に入り混じる栄東のような街区

では、その合意形成が難しい。栄東まち協の林事務局長も、その辺を苦労している様子だった。



意見交換の中、栄東の状況をじっと聞いていた吉村さんは、「合意形成型のビジョンづくりでなくてもいいのでは?」とコメント。また、「みんながなんとなく共有できるものを作つておいて、自発的にいろんなアクションが起きていく仕掛けがあるといい」とも。この考えには、林事務局長も大きく頷いていた。ここでも、やはり“みんな”である。複雑な構成員が入り混じる地域の合意形成にあっても、すべての人ではないが、特定の人を排除しない“みんな”はキー概念になる。ビジョンには、この“みんな”的な関わりしろがあることが大切なのだ。もちろん、そこに既に活動している人々が含まれることは指摘するまでもない。むしろ、そうした人

たちと“みんな”との関係性を再構築することで、活動全体のさらなる公共性をブランディングできる。また吉村さんの言う「自発的にいろんなアクションが起きていく仕掛け」については、意見交換の中にたくさんのヒントがあった。栄東は、街区の中心地に名古屋市で唯一管理が地域に委託される池田公園があり、50年も続いている夏まつりなど手作りのイベントが地域主体で実施されている。そのイベントの様子を語る時の辻本会長と田端副会長の言葉には、地域への愛着や誇りが充ち満ちていた。シビックプライドという概念があるが、これは一朝一夕には求められない。新しくつくるというよりは、既にある価値の再発見ともいえる。長い時間をかけて育まれてきた地域の出来事を受け継ぎ、また時代に合わせてアップデートさせて、その先に新しい伝統や確かな誇りを醸成する。これは、地域の主体形成でもある。栄東まち協の活動に刺激をいただき、港まちでも地域の在り方を、再度問い合わせし、地域が自らの誇りを育てていけるような仕掛けづくりに取り組みたい。

シビックプライドとアイデンティティ

2019年8月末、私は開港150周年を迎えている新潟市を訪れていた。新潟の県市が合同開催した「万代島地区将来ビジョンを考えるシンポジウム」における基調講演とパネ



ルディスカッションのコメントーターを拝命したからだ。それは、シビックプライドやアイデンティティという言葉を思考する良き機会となった。万代テラスの水辺を歩くと、「みんなでつくる、みなとまち新潟スタート!」と記されたフラッグが爽やかな風になびいていた。その近くには、「What's NiiGATA」の巨大なモニュメントも。あなたにとってのNiiGATAとは何か?を問うシティプロモーションである。ポップかつ根源的に都市の在り方を探求する素敵なプロモーション。オランダのアムステルダムでは「I amsterdam」、神戸では「BE KOBE」など、シビックプライドを醸成する取り組みが、いずれも港まちで盛んなことは何かの偶然か?地域の中の由緒を訊ね在り方を問う。自らのアイデンティティを求める風土は港まちの共通項なのかもしれない。シビックプライドは、この地域における自己発見(=アイデンティティの探求)のプロセスの中に育ち行くものだろう。

シンポジウムには、新潟大学教育学部附属新潟中学校の生徒たちが参加しており、総合学習の時間で考案した将来ビジョンを発表、パネルディスカッションでも大活躍だった。相手の話を聞きながら自らの意見を柔軟に変化させ、より本質的な見解に迫ろうとする大人顔負けの対話的姿勢に感銘を受けたのは私だけではないだろう。学び、発見し、提案することが「楽しくて仕方がない」という若き探求者の姿に、大人はもっと学ばねばならない。



最後に生徒たちそれぞれが語ってくれた「古いものを大切に新しいものとつなぎたい」「僕は地域を盛り上げる人になる」「これからの150年へバトンを渡したい」という言葉は、シンポ

ジウムをまとめる象徴的な言葉となった。まちづくりと教育の融合は、自ら寄って立つところの地域を立て直し、人々が誇りを取り戻す機会を与えてくれるのだろう。

今できることに手を抜かない

“みんな”とは誰かを積極的に問い合わせながら、一人ひとりが生きていることを実感できる場を、これからの街の中に創り出していくと願う。時代が大きく変わる中で、その変化を直接体現する街をどう創造していくのか。逆にいえば、そうしたまちづくり、地域創造への関わり方を通して、私たちは、それぞれの人生を築いていく。その意味で、私たち一人ひとりの小さな振る舞いこそが問われているのだと思われる。
こかた
ビジョン、街の行く末を考えるにあたっては、街の来し方を知ることがとても重要だ。それには、残された記録だけでなく、街の今を生きる人々に宿る記憶に直接的に働きかけたい。私の経験からすれば、そうした人々との対話では、固定化していた街のイメージは瞬く間に崩れ去る。知っていたはずの街の風景がとき解かれていくと、そこには街の在り方のようなものが顔を出す。それはビジョンの核となるコンセプトに通じるものだと考える。
ほと
ビジョンを考えることは、結果を意識することではあるが、結果は起るものであって、それを目的化してしまうことは抵抗を感じるというのも偽らざるところ。理念に行動が縛られ過ぎるのは健やかではない。それはあくまで仮説でもあるのだ。したり顔で未来を語るより、今できることに手を抜かないで十分にやることが基本。機が熟せば、芽は必ず花開くのだから。

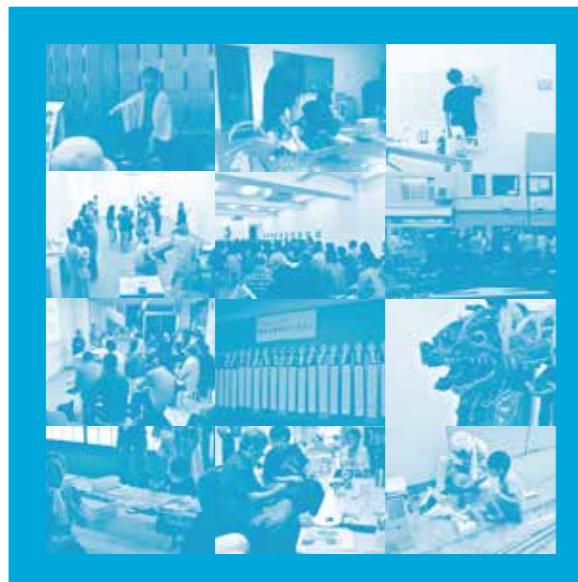
[1] 「(みん)なとまちVISION BOOK」で示した、港まちづくり協議会のコンセプトコピー。「名古屋中のみんなと楽しめて全国の皆さんに誇れる『みんなの港まち』を目指す」を定義している。
[2] 街と地域の定義は、法律用語においても意外と曖昧である。ここでは、議論の中で使われた言葉が地域であったため、それを用いている。使い分けは、文脈を考慮して今後も検討していきたい。

- [a] いつも活動の中心にはビジョンブックがあった。
- [b] 本書は、日本の社会構造や文化を理解する上での大切な一冊。
- [c] 「みんなのものは誰のもの?」をテーマにしたトークイベントPotluck School。ゲストは、岐阜県立図書館長の吉成信夫さん。
- [d] 栄東の夜の街で一杯!
- [e] 栄東まち協の活動エリアにある池田公園。夜の賑わいがこれから始まる。
- [f] インスタ映えスポットとしても人気。
- [g] 新潟の沼垂テラス商店街の素敵なカフェ「Tsumugi Coffee and.」。

港まちづくり協議会
2018年度報告書

DATA

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
ANNUAL REPORT 2018



○ 暮らす | LIVES

心地よく安心な港まちで「暮らす」
Living in comfortable and secure port town

△ 集う | MEETS

魅力的でにぎやかな港まちに「集う」
Gathering at amusing and exciting port town

□ 創る | CREATES

みんなと港まちを「創る」
Creating the port town together

開催事業数・テーマ別事業パートナー数

項目	開催事業数	テーマ別事業パートナー数
○ 暮らす LIVES	90	22
△ 集う MEETS	13	37
□ 創る CREATES	77	57
名古屋市要望事業	5	5

○ 暮らす LIVES	△ 集う MEETS	□ 創る CREATES
みなとまちBOSAI	地蔵盆まつり	提案公募型事業
・三世代グラウンドゴルフであそBOSAI	名古屋みなとをどり	・港まちの文化と健康を守ろう
・真砂町内会防災ワークショップ	アッセンブリッジ・ナゴヤ連携事業	・みんな芸術家(描いたり 創ったり)
・慶和幼稚園防災訓練	・みなとA GO GO!	・港まち手芸部
・港まちカルタ	・港まちお店マップ	・港まち俳句の会
AED設置・AEDマップの作成	・ポットラックバザール	・みんなで見上げよう夏の夜空「火星大接近!」
港まち文庫の設置		・大学生によるみなとまち建築プロジェクト
コミュニティ活動の推進		・空きスペースを利用した
・子育てサロン「まちの遊び場へ行こう!」		「0円ショップ」イベントin港まち
・子育てサロン「プレイハウスWAFF」		拠点活用事業
・みなとまちガーデンプロジェクト		・2F まちを綴る taste our tracks
・防潮壁プロジェクト		・2F みんなとまちでなにする?展
		・3F スタジオプロジェクトvol.4
		・3F 絵画の何かvol.3
		・ボタンギャラリー ホームセンター
		・ボタンギャラリー カラーピール
		・ボタンギャラリー 殿様のわらじ／アーカイブ
		ビジョン改訂ワークショップ
		ポットラック新聞・ポットラック新聞かわら版
		名古屋都市センターでの展示

港まちづくり協議会の活動参加者数

○ + △ + □ = 延べ17,695人

メディア掲載実績

2018年度には提案公募型事業の実施団体の活躍もあり、多くのメディア掲載の機会を頂きました。ビジョン改訂のプロセスでは、私達の取り組みをまだまだ伝えきれていきたいたいと思います。

媒体	掲載数
新聞	23
WEB	25
テレビ	3
ラジオ	1
雑誌・広報誌	3
総掲載数	55

会計報告

2018年度の収入額は71,000,143円、支出額は64,227,994円で、本年度の収支差額は6,772,149円となりました。支出内訳としては、「○心地よく安心な港まちで『暮らす』」が4,245,262円、「△魅力的にぎやかに『集う』」が4,521,254円、「□みんなと港まちを『創る』」が32,026,878円です。事務局運営費23,434,600円を含め、収支差額6,772,149円を名古屋市に返還しました。

項目	予算額	決算額
収入	71,000,000	71,000,143
支出	71,000,000	64,227,994
○暮らす LIVES	6,227,000	4,245,262
△集う MEETS	4,839,000	4,521,254
□創る CREATS*	59,934,000	55,461,478
収支差額	0	6,772,149

*事務局運営費含む

港まちづくり協議会 2018年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
ANNUAL REPORT 2018

2018年度 港まちづくり協議会メンバー

会長	早川 勝利(西築地学区連絡協議会推せん)
副会長	坂野 嘉紀(築地口商店街振興組合推せん)
委員	成田 英樹(名古屋市港区役所区政部長) 河田 正巳(西築地学区連絡協議会推せん) 鶴飼 茂彦(西築地学区連絡協議会推せん) 安井 宗敬(西築地学区連絡協議会推せん) 松本 一男(西築地学区連絡協議会推せん) 大口 靖夫(西築地学区連絡協議会推せん) 酒井 雄一(名古屋市総務局総合調整部総合調整室長) 宮島 葉子(名古屋市市民経済局地域振興部地域振興課長) 塙沢 洋(名古屋市住宅都市局都市整備部名港開発振興課長) 箕浦 慎治(名古屋市緑政土木局港土木事務所長)
事務局長	大野 宏之(名古屋市港区役所企画経理室長)
事務局次長	古橋 敬一
事務局員	岡西 康太 児玉 美香 川口 純 岡田和奈佳



制作 港まちづくり協議会
企画・編集 古橋 敬一、岡西 康太
デザイン 株式会社クーグート
印刷・製本 株式会社石田大成社
発行 港まちづくり協議会
〒455-0037 名古屋市港区名港1-19-23 Minatomachi POTLUCK BUILDING
TEL | 052-654-8911 FAX | 052-654-8912
E-MAIL | info@minnatomachi.jp WEB | www.minnatomachi.jp
2019年11月